印象に残る都市～愛され続ける都市空間の計画と教育～

愛知産業大学
講師　小杉　学

元々は東京でマンション建て替えの住民合意を研究していましたけれども、４年前岡崎に来まして、それからは住民参加でまちづくりを進めるということを研究させて頂いております。また私自身４年前から、岡崎市民ということで、岡崎の南部にあります緑丘という町で暮らしております。今日は、なるべく難しくない話をしようと心がけます。また私自身、市民だという視点を加えてお話ししたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。早速話に入りたいと思うのですけれども、「岡崎学」ということで、これまで色々な先生方がお話されたものの多くは、岡崎の過去の色んな歴史的なことですとか、現在のあれこれということだと思うのですが、私は岡崎の未来、これからのことについて考えていることを少しお話させて頂ければと考えております。

１.印象に残る都市

岡崎の未来を考える視点は、今日のタイトルにもなっていますけれども、印象に残る都市というものを考えてみたいと思っています。これは、私は２１世紀において豊かな都市というものの条件になるんじゃないかと考えております。印象に残る都市とは、言い換えると、豊かな都市の印象がいつまでも頭の中に焼き付いているという、そんなイメージですね。印象に残る都市というのは、色々なパターンが考えられますが、どういうことが印象に残るかっていうのは、例えば歴史的な文化があるということが印象に残る。まさに岡崎はそうですね。徳川家康さんとかそういったことで色んな人の印象に残ると思います。または、名物があるとか名所があるとか、例えば味噌煮込みうどんとか、そんなものがあって印象に残るっていうことがあると思います。何か凄いことじゃなくても、たまたまその都市に住んでいたことがあったとか、例えば岡崎の大学の４年間過ごしていた時に、あれこれがあったというようなことで印象に残っているっていう都市もあると思います。ですが、今日私がお話したいのは、この色々な印象に残る要素のうちのひとつの、「市民から愛され続けている都市空間がある」ということで印象に残る都市というのが出来たら良いなと。岡崎に限らず、これからの地方都市それぞれが人々から愛される独自の都市空間を持っていて、印象に残るということがこれからの豊かな都市なのではないかと考えているわけです。

「都市空間」、少し言葉が難しいかもしれませんが、難しければ「風景」だとか「景観」と理解して頂いて構わないかと思われます。今日のお話のねらい、ちょっと難しく言っていますけれども、私が先程から申しています「印象に残る都市」とか、「愛され続ける空間」というのは具体的には何なんだろう、何でそんなものが必要なんだろうということを考えていきたいということです。実は私も、はっきりとはわかっていません。まだ考え続けているものなんですけれども、「愛され続ける都市空間」はどういうふうに計画

できるのだろうか、実現できるのだろうかって、もう答えが出ているわけではありません。是非また皆様からご意見を頂ければ良いなと思っております。

まず、印象に残る、愛され続ける都市空間、私自身が岡崎に対して何を思い浮かべるだろうと思うと、名鉄電車で名古屋方面から岡崎に来るときに、乙川を渡る瞬間ですね。あれは本当にもう豊かなイメージで私の中には残っているわけです。この一瞬見えてまたまちの中に入っていくわけですけれども、この瞬間にやっぱり空が広がって、川があって、それで岡崎のまちがこう見えてですね、この瞬間というのが本当にいつ乗ってても良いなと思うし、夜出張から帰ってきた時もほっとする瞬間であります。こういうふうな些細なことですね。こんなのまちにとって大したことじゃないじゃないかって思う方もいるかもしれないですけれども、こういうふうな精神的に何かこう満足出来ることっていうのがいくつあるかっていうことが、これからの都市に重要かなと思っています。

乙川っていうのは私が大好きな岡崎の中の都市空間のひとつです。まちづくりを考える時に、学生とまち探検をする時にも必ず立ち寄りますし、妻と散歩に出掛けたりするということもありますね。春になるとお花見がありますし、夏になると本当に花火が良いですね、印象に残ります。そういうふうに、お花見ですとか花火、そういうふうなわかりやすいイベントも勿論重要なんですけれども、私なんかはその場所に行くとじわじわっとこうですね、何かこう精神的な豊かさというんでしょうかね、満足感を覚えるわけですね。緑があっていいねっていうだけではなくて、何か心の底から精神的にほっとするとかですね、そういうふうなものがある都市、あるまちというのがこれから選ばれるのではないかと考えているわけです。

乙川は色々な風景、多様な風景を見せるわけですね。親子でのんびり過ごしている人も居たり、川の中に噴水があるっていうのもおもしろいですね。皆さん勿論岡崎に住み続けていて、当然のことのように見えているのかもしれませんけれども、東京から来た私には面白かったわけです。潜水橋っていうんですかね、水面ギリギリのところに橋が架かっていて、台風の時なんかは水の中に潜っちゃうみたいですけれども、こんなところで魚に餌をまいている方が居たりとか、時たま電車が通ってがたんがたんと音が鳴ってっていう、まあそんなのどかな風景が非常に好きです。

岡崎城が結構有名なんですが、実はその都市空間とか風景っていう点で考えた時に、案外町の中から見えないし、岡崎城っていう言葉以上に岡崎城の姿を思い浮かべる方っていうのは実際少ないんじゃないかなと思います。河原に行っても、本当にようやくこの緑のところからちょこんと頭を出す程度で、余程こちらのマンションの方が目立っているわけです。この近くにあるホテルのレストランまで登るとようやく緑の中から天守閣、お城が顔を出すというようなことですね。岡崎城というのは、言葉以上に印象に残る都市空間のイメージにはなっていないのではないか、ということで？マークを付けさせて頂いております。

また、大きいタワーマンションが最近建ちましたけれども、至るところから見えるわけです。本当にこういうところに住むっていうのは見晴らしも良いですし、うらやましいんですけれども、一方でこういうふうな風景、都市空間を、私たち市民は見続けなけ

ればいけない。至るところから目立つんですね。こういったものに対してちょっと折角建てるんだったらもう少し愛され続けるようなデザインっていうのは出来たんじゃないかなと、少し残念に思うわけです。岡崎城址公園の伊賀川のところからやっと岡崎城が出てきたと思うと、後ろにタワーマンションがあったりして、ちょっと何か残念だなって。これは要するにタワーマンションを建てた人とか、住んでる人が悪いという話ではなくて、私も含めて色んな人がちょっとこういうことを予測して会議することが何か出来なかったのかなということが悔やまれるわけです。「やっぱり岡崎城」と言うのであれば、それが印象に残るような都市空間の作り方というのが出来たんじゃないかと悔やまれるわけです。（タワーマンションは）本当に目立つわけでＪＲ東海道線に乗っていると矢作川を渡る前後からもずっと見えるんですね。ややもすると岡崎のシンボルぐらいになっちゃうんですけれども、そうであるとしたら残念だったなっていう。ごく普通のじゃない形が出来たんじゃないかと悔やまれるということです。せっかく私の大好きな綺麗な乙川の近くに、中心部に住むっていうことは便利なのでマンションが続々と出来ているようで。中心部が賑わっていくということ自体は本当に良いなというふうに思うんです。ただやっぱり一つひとつがですね、何かこう少し揃えたり、乙川に配慮したデザインというのがあったり、一つひとつがですね、あまりに勝手なデザインになっちゃうというのはもったいないなというふうに思います。あとでお話もしますが、海外に行きますと川沿いの風景というのは、建物が調和していて、印象に残るようになっているわけです。そういった方向を岡崎でも目指せないかなというようなことを、岡崎に４年前来て、まちづくりを考え始めた頃に思ったりしたわけです。

東岡崎の駅前、岡崎のおそらく岡崎駅と同様に岡崎の顔となる部分だと思うのですけれども、何か色々な他の都市にもありそうな風景になっているのではないかと私は感じているわけです。これがいけないと言っているわけではありません。こういうことは皆さんで考えていくべきなんですけれども、好き勝手に広告が貼られている感じがあったり。あとモダン通りのところは電線を地中化して電線が上に走っていないんですね。路面も煉瓦ブロックを貼り付けてですね、綺麗に整備したかのように思えるんですけれども、結局言われてみないとわからないというぐらい、周りがごちゃごちゃっとした感じになっているということですね。東岡崎駅に着いて町に出た時の風景っていうのは、商業地だとはいえ、これで本当に良いのかなということを考えてしまうわけです。次々と見せますけれども、これが西三河合同庁舎の７階あたりから駅の北口を見るんですけれども、ちょっともうこうなってくると、知らなければ岡崎以外の地方都市と区別がつかないという感じになってしまうわけですね。

こういう風景に対してよく専門家が、戦後の都市計画は失敗だったとか、私の親の世代とか、皆さん方の世代がやってきたことが間違っていたというようなことも言われる方もあるんですけれども、そこまでは私は否定しなくて、その戦後の復興とかも含めて一生懸命豊かさを追い続けてきた結果がこういうことだったということで、それ自体は尊重しなければならないのかなと思っています。ただ、これから２１世紀にかけてこれと同じことを続けていくというのはどうなんだろうか、というふうに思うわけです。む

しろ私たちの世代がこういうことを続けていくのではなくて、違うことでまちに対して関わっていかなければいけないのではないかと思っています。

さて、何となく「印象に残る都市」というようなことをイメージ的に見てきたわけですけれども、ちょっと難しい話ですが、私が大学で都市計画を教えている時に、２０世紀の都市計画の中で良い都市の条件というのがよく４つ言われるんですね。まず、安全であること。交通事故が少ないとか、自然災害から守れるとかそういうことがあります。２番目に保健性と申しまして、ごみごみしていないとか、日照が確保されていてお日様の陽射しが入ってくるとか、衛生的であるとか、そういうことが確保出来るかということですね。３番目に利便性。これは皆さんも特に希望されるかと思いますけれども、バスが何回も出ているとかですね、鉄道が使いやすいとか、バリアフリーであるとか、あと色んな商業施設や公共施設もあるというように便利であるということですね。それから４番目に緑地が多いとかですね、町並みが美しいとか、楽しい出来事がある。花火があったりとか岡崎はしていますけれども。そういうふうなことが揃っているのが、よい都市ではないかというふうに言われてきたわけです。

けれども、これだと日本全国の都市がこれを目指した結果どこも変わらないような都市になってしまったということになってしまって、最近言われているのは、２１世紀は１から４の要素も勿論必要なんですけれども、５番目に、精神的に疲れている人も世の中多いので、そういった時にまちが貢献出来ることとして、「その町に住んでいて良かったな」「岡崎が大好きです」「岡崎のことを誇りに思っています」というふうに、自分の拠り所なるような、精神的な部分での満足度が得られるかっていうことですね。それが非常に抽象的で難しいんですけれども、これが５番目の条件です。それと６番目。これは良く聞いたことがあるかと思いますけれども、持続可能性、sustainability（サスティナビリティ）なんて英語で言いますけれども、要するに１番目から５番目が完全に整っている町でも、１年後２年後に衰退してしまうような都市ではしょうがないわけです。これで完璧と思ったような都市でも、経済状況が外側から悪くなっていったり、色々な状況の変化で、都市が持続しないなんていうことも脅しではなくてあるわけですね。そういったことに市民の人達、行政の人達も含めて創造的に対応出来るか。状況が変わってきた時にもその都市が持続出来るように自分達でアイデアを考えて、知恵を振り絞って状況の変化に対応出来るか、そういったことが６番目に重要だというふうに考えてられているわけです。

次に持続可能都市っていうのは何だろうなということをここで考えていきたいんですけれども。予想もしないような様々な社会の変化に対応して生き抜いていくためには、その創造力っていうのが必要不可欠だということです。クリエイティブに物を生みだしていく力ということですね。都市がそういうふうな力を身につける為には、「創造力が豊かな人々」が町の中に居ないといけない。「創造力が豊かな人々」が居る都市が持続可能な都市だと言われているわけです。そうだとするならば、その創造性豊かなまち、「創造的都市」というふうにここ（プロジェクターの画面）では１番上に書いてありますけれども、それはどういうまちなんでしょうか。「創造力が豊かな人々」が集まってくるよう

な都市、あとは創造性がその都市に居るということで、何というんでしょうかね、はぐくまれてくる。「創造的な人々の活動を支えてくれる都市」というのはどういう都市なのか。なかなか難しいかもしれませんけれども、そういったことをですね、ここで考えてみたいと思っております。

例えば都市の名前は明かせませんが、城下町なんですけれども、まちを盛り上げる為に江戸時代の町並みを再現して観光客を当て込もうとしたということですね。このことに一生懸命町の人達も行政の方達も考えて、こういう町並みを再現したということで、本当にその苦労は大事にしたいなというふうに思うのですけれども、やっぱりあえて私がここに創造的都市に？マークを付けているのは、ややもするとその形を復活させることに力を入れて過ぎてしまったかな。テーマパークのような町並み、ちょっと言い方が悪いんですけれども日光江戸村じゃないですけれども、綺麗にピカピカに造りすぎちゃったのかなという、要するにそこに人々が生活している感じがなかなか受け取れないというのが、残念ですね。これを見てて思うのが、岡崎の景観とか風景を造っていく上で、「二十七曲がりを復活させよう」なんていうような話も出てくるかと思いますけれども、そういった時にこういう感じにならないと良いなっていうふうなことを思うわけです。

じゃあ、どういうところが良いのかというと、私が良く紹介するのは、埼玉県の川越というまちですね。こちらも同じように古い町並みがあって、蔵造りという住空間が江戸時代の建物、江戸時代までいかないか、明治時代ぐらいの建物なんですけれども、こういった町並みがあって、近代に入ってこの手前に色々看板を出したりとかして、この建物が隠れていたんですけれども、こういったものをはがして昔ながらの町並みを戻してきたということなんです。これ（写真１）がやっぱり私は必要だと思っていて、古い町並みを完全に保存するということではなくて、この町が創造的でみんなで良く考えたなと思うのは、こういう現代的な建物も許容していくっていう、許していくっていうそういう考え方ですね。ここにコンクリートの小さい美術館があって、レストランなんかが入っているんですけれども、だけども身勝手な建物かというとそうではなくて、この屋根の傾斜角度、勾配、これをちゃんとその場所に合わせて、この軒のラインを合わせていたり、町並みに配慮しながら新しい物も入れていく。こういったことが非常に創造的な感じがするわけです。この建物の奥の方に入っていくと、おしゃれな中庭もあって、レストランがある。こういうふうな古い物を尊重しながら、新しい物を受け入れていく。こういうものも創造的な都市なんじゃないかと言えるわけです。

（写真１：川越の町並み）

そしてもうひとつ、滋賀県の長浜の黒壁というところなんですけれども、ここはまちづくりでは超有名な事例なんですけれども、ここは市民の人達が行政と協力して「まちづくり会社」というのを作って、老朽化した町の中の建物を買い取って、古い町並みに合わせながらお店を作り替えていくわけです。その中で、このまちの人達がテーマにしたのはガラス工芸品で、ここではその古い黒い壁で出来た銀行の中を改装してガラス細工を売っています。ここには、また隣の建物を古くなったのを買い取って、ガラス工房を職人さんがガラス細工を作るわけです。あるところは、観光客がガラス作りを体験出来るような場所を作ったりしてるわけです。そんなことをして今では３０店舗以上が、この黒壁スクエアと言われている町の中のエリアにこの会社が作った建物があったりして、非常に賑わっているわけです。おもしろいのはこのガラス工芸品というのは、この地域の昔からの産業だったわけじゃあなくて、これからの時代にガラス工芸品というのが何か魅力を持つのではないかと。何か古い感じもあり、新しい感じもありということで、そういうことをテーマに決定して、今ではガラス工芸のまちというイメージが行き渡っていて、まちの人達もそういうテーマに沿ってまちづくりを進めていくっていう。これは本当に創造的な都市じゃないかなと言えるわけです。コンビニエンスストアですとか、パチンコ屋ですとか、この地域にそぐわないようなものは、なるべく入れていかないようなことをまちぐるみでやっているということになります。

ちょっと極端な例ですけれども、京都駅に、大きい最新型のビルが出来たんですけれども、これなんかも論争があって、「古いまちの京都にこんな建物いらない」というような意見もいっぱいあったんですけれども、私が訪れてみて、その駅の中の９階建てぐらいの吹き抜けの大階段があって、そこでイベントをやってて市民の人達が楽しそうに使いこなしているわけです。だからその古い文化を守るだけじゃなくて新しいものも受け入れていくっという、そういうふうな力が京都の魅力じゃないかなと思っているわけです。勿論岡崎の都市に、こんな大きいものを作れということではなくて、京都なりの大きい都市だから必要になったわけですけれども、そういう古いものを尊重しながら、新しいものを受け入れていくという、そういうふうな創造的な都市っていうのがひとつありうるかなと思っております。

何も大きい建物だけが良いわけではありません。最後の事例として静岡県の三島市に新幹線の停まる三島駅の近くに源兵衛川っていう町の中を流れる川があって、元々は本当に戦後ドブ川になってしまって臭い川だったんですね。だけど市民の人達が一生懸命にこれを掃除して行政に協力したんですけれども、それで環境を整備して、何と川の中を歩けるっていうような、こう

（写真２：源兵衛川）

いうもの（写真２）を整備してもらって、ずっと川の中を歩いていけて、本当にこれはね、楽しいんですね。こういうふうなものを、やっぱり行政にお願いして作るということではなくて、市民の人達が自分達でこういう綺麗な水の状況を作り上げていったということに、創造性を私は感じるわけです。子ども達が楽しそうに虫取りをしていたりしますし、川の水が驚くほど綺麗なんですね。都市の真ん中なのに。こういうところに佇んでいる子っていうのは将来大人になった時にこの川を汚すようなことはしないだろうと思うわけです。川が綺麗になっていくと、おもしろいのはその周辺にへばりついている住宅とかお店が、それまで川に対して後ろ向きだったのに、何か川と接点を持つような植栽のデザインをしていくわけですね。飲食店では、川にまで降りていけるようなものを作ったり、イタリアンのお店なんですけれども、川に面したところにカウンターを出して眺められるとか。この下の二つは私は行ってみたら感動したのですけれども、この住宅が自分で橋を架けてそこにいっぱい植物を並べて川を綺麗に見せようというふうに楽しんでいるわけです。誰かに作ってもらったのではなくて、市民の人達が創造的に、まちの景観、都市空間、印象に残るまちっていうのを作り上げているっていうのが素敵だなと思うわけです。

さて、こういうふうな考え方を、私たちの専門領域では、最近、「生活景」という言い方をしているわけです。生活景というのは海外の都市に行って宗教の建物がダイナミックで凄いという風景とは違って、人々の生活の営みそのものが色濃く滲み出た景観ですね。だから権力者だとか専門家だとか知識人が作ったということでなくて、無名の生活者、職人達によって日々の営みが美しく見えるっていう、そういうふうな生活景っていうのがこれからは取り戻すべきではないかという考え方が出てるのですけれども、その日本の風景は全般的にですね、ややもすると少し貧しいかなって思われるのは、私たちの社会が生活景を見失ってしまったこと、私も含めて市民の人達が生活景、こういうふうな「生活の営みの景色って大事だよね」っていうことを忘れてしまって、違う豊かさを求めてしまったということに起因しているのじゃないかと、千葉大学の北原先生はおっしゃっているわけです。

さて、方程式なんていうとおこがましいのですけれども、私なりにここまでの段階で、印象に残る都市空間、印象に残る都市の風景というのはどういったものだろうかと考えてみますならば、美しい都市空間があるだけではなくて、そこで楽しい市民活動を、お花見があったりとか、さっきも源兵衛川で虫取りをしている子供達とか、そういうものが重なる時に印象に残るのではないか。更に、それを眺めた時に、その角度っていうんでしょうか、印象に残る構図になるような場所があるかっていうことが重要じゃないかと思うわけです。そのいずれも、その市民を中心とした創造力、専門家にお願いして作ってもらうんではなくて、自分たちで作り上げることができるかということが、これからの都市の課題だと思っております。

そういった印象に残る都市というのが、どうやって考えていけば良いかというヒント

が、いくらか私どもの専門領域ではあるのですけれども、まずその印象に残る都市の要素のひとつに「ランドマーク」という考え方があります。例えばパリだとエッフェル塔とか、大阪では梅田のスカイビルなんておもしろいビルが出来て、胴体の部分はガラスにして空に溶け込む感じで、上の方に空中都市があるような、変わった造形なわけです。その都市らしいっていうふうに思えるような目立つものがひとつ必要じゃないかということですね。

あと、「パノラマ」と言って、景色がダーっと広がって見えるっていうところには人間はもう無条件に感動してしまうわけです。そういうふうな場所を設置するっていうのもあって、岡崎だと中央総合公園ですか、あそこからの眺めは凄く綺麗なんですけれども、海外の都市でも必ずそういうふうに眺めるところがあって、海外の都市ではちゃんとランドマークが見えるように周りの建物は高さを落としているわけですね。だいたい中世からの都市には教会の塔があったりしますし、リヨンという古い町では、最近建てた超高層のホテルも茶色くして、周りの屋根の雰囲気に合わすようにデザインを配慮しているわけです。あとはパノラマとは違って一直線に眺められる、突き抜けるような感じの眺めっていうのも都市にあると印象深いというふうに言われています。フランスのパリだとシャンゼリゼ通りというのがあります。こういうふうに見通せる眺めなんていうものも素敵な都市を、印象に残る都市を作る条件だと言われています。

それと「シークエンス」。これはその道を歩いて行って、どんどんと風景が変わっていく楽しさがある都市というのも非常に印象深いんじゃないか。スイスのジュネーブというところに行った時に、町の中から１本の道を歩いて行くと、路上のカフェに出て、細い階段をトントントントン下りて行って、アーチをくぐって、やっと広場に出るというような。連続した景色が変わって行く。移動に伴って景色が変わっていく。こんなのも非常に印象深いんで、こういうふうなものを都市の中に作れたらひとつ良いのではないかというふうに考えるわけです。

そして「橋」ですね。橋というのも都市の中で非常に印象深い要素です。イギリスのロンドンには、ミレニアムブリッジっていう、ケーブルで吊っていて、近代的なデザイン、最先端の現代的なデザインになっているんですけれども、このロンドンの町並みを壊さないように、薄く設計されているようです。イタリアに行きますと、何と橋の上に町があるなんていう、こんなおもしろい橋もあったりしますし、先程紹介した源兵衛川ですね、三島の、これ本当におもしろいんですよね。さっきの川の中を歩いていく道ですけれども、それが橋をくぐるようになっていて、ここに「頭上注意」なんて書いてあってですね、渡る人はちょっと屈みながら渡っていくわけです。私が行った時もサラリーマンがわざわざここを通るわけです。ちゃんと下に普通の道もあるわけですからそちらを歩けば良いんですけれども、わざわざここを歩くというのは何かその生活のリズムとして楽しいんだと思います。

更にどういうふうに都市をデザインしていくか。「スカイライン」と言って、この空と建物とのこの際ですね。ここを美しくデザインするということもひとつあるわけですね。横浜では、ビルが３本建つ時に段々とこう波のような感じで落ちていく。最後にはヨッ

トの帆みたいな感じにするってふうに、こう１本１本のビルを勝手に建ててしまうんじゃなくて、最初から申し合わせをしてひとつの絵になるようにですね、コントロールするっていうことも場合によっては岡崎だって出来ない話ではないとは思っております。

更に、岡崎城ですね。やっと出て来ましたけれども、最近「りぶら」という大きい図書館が出来ましたけれども、あそこを市民参加で話し合って作る時も、外側のデザインをどうしようかという話の時に、やっぱり岡崎城が近いので、「この白と黒の石の感じを活かそうよ」ということで、白いラインと黒いラインで岡崎固有のデザインコードというか、デザインのあり方というのもちゃんと活かしていって、独自の風景の見え方に活かしているわけです。「りぶら」でおもしろいのは、行かれた方はわかると思いますけれども、その建物の中に建物自体がまちみたいになっていて、真ん中に大通りがあるんですけれども、それが乙川だとかお堀があったというわけですね、そこの場所に元々。そういうふうな曲線を活かしているっていう。こういうふうに乙川の雄大なイメージとかお堀のゆったりとしたイメージが、こういうふうにカーブで入ってくる。そういうふうに歴史の引用をして、丸ごとそのまま古い建物を復活させるんじゃなくて、新しいデザインの中に活かして継承していく。こういうことが非常に重要かなと思っているわけです。

２．将来の都市像をイメージする

じゃあどうやってそういうふうな都市をこれから作って行けば良いか、という時に、かつて１９６０年に丹下健三という世界的に有名な建築家が、東京大学の先生をやっている時に学生と一緒に「東京計画」というものを作りました。これから情報化社会になるにしたがって、今までの都市では駄目だと、機能的で人々が情報を交換したりすることが素早く出来るっていうんでしょうか、効率良く出来るように、海の上に都市を作るべきだというふうに提案したわけなんです。何が重要かというと、この丹下先生が提案した都市の機能が重要なのではなくて、「これからこの都市はこういうふうに、こっちの方向に向かって欲しい」っていう方向性を出す仕事っていうのはひとつあるわけですね。そう考えると、岡崎にはあるんでしょうか、ということですね。「岡崎が将来こういうふうなまちのイメージになったら良いな」ということがあるのかというと、なかなか無いっていうことで、そういったものが必要じゃないかなと思っております。

最近では、東京大学の大野先生という方が東京をテーマにして「ＴＯＫＹＯ２０５０」という計画を発表しました。これは人口が、これから４分の３ぐらいに減っていくわけですから、拡がってしまった東京もそのままでいるわけにはいかないということで、拡がってしまった郊外をちょっと強引ですけれども元に戻していくという、そういう都市のイメージですね。将来こういうふうになっていくと良いんじゃないか。その代わりこういうところに電車が走っているんですけれども、電車に乗れる駅を思いっきり増やすわけです。町は駅から半径８００メートルの、車に依存しなくても歩けるような、高齢者も歩いて暮らせるようなまちに戻していくべきだという、そういう理想を提案したわけです。

先程から申しておりますように、今のまちを良くしていくような取り組みは、岡崎にはすでにいっぱいあって、私も岡崎に来て驚くようにみんな熱心にやられていて、それは本当に良いなと思うんです。けれども、それぞれが勝手な目標像、勝手と言ってはおかしいですね、それぞれが目標像を立てて動いているのですが、そういう目標像が共有されるといいなと思うわけです。石川栄耀先生というのは、都市計画の昔の大家なんですけれども、そもそも戦前の都市計画が始まった時に「何年もかけてこういうふうな町になると良いな」というイメージ、すなわち「都市像」が市民の中に根付いていることが都市を作っていく上で重要だということをちゃんと言っているわけです。また、西山夘三先生って亡くなられましたけれども京都大学の先生が、示された「都市像」のように実際にきちんと実現しなくても良いと。ただ、こういうふうなもの（都市像）を示すことで、「そっちの方にみんななるべく向かおうよ」というふうに誰かが示すということが非常に重要であるとおっしゃっていて、私は非常に共感するわけです。皆さんはどう思いますでしょうか、ということを後で聞きたいんですけれども。ということで、その「都市像」、都市の目標像、「こういうふうな都市になったら良いな」ということ無いままに続ける都市計画とかまちづくりから、なるべく脱却した方が良いのではないかというふうに思っております。

さて、なぜ愛され続ける都市空間が出来ないのかということですね。先程混乱した風景なんていうふうにちょっと厳しめに申し上げてしまいましたけれども、それは行政が悪いのでもなくて、専門家が悪いとかそういうふうなことではなくて、やっぱり私も含めてそういうふうな都市像というものを、私たち市民がみんな持っていないからですね。みんなが望むような都市の姿というものがなければ、その都市が良くなっていくはずもないというような考え方があるわけです。都市像というのは、ここでまとめてみますと、誰かがこうポンと作って、それで固定されるわけじゃなくて、常に市民の人達、専門家も含めて、作り続けていかなければいけないんじゃないかなと思っているわけです。「岡崎の将来の都市の姿ってこうなると良いよね」ということを、常に皆さんで考え続けていって共有するということが重要かと思っています。そういうふうに考えるならば、市民の皆さまは本当に都市像というものを、重要だと思って頂けるのか、欲しいと思うかということが、またひとつ難しい問題になってくるかなと思っています。また、市民の皆さまが、都市像、例えば岡崎の都市の将来像というものを、どういうふうに作っていけば良いのか。これもまた難しい問題です。

ということで、まず最初は、都市像っていう、都市の目標っていうものについてどうあるべきか、いきなり作ろうということではなくて、みんなでお勉強していかなければいけないのではないかと思っています。これは、私が都市像について全部もう詳しく知っていて皆さまに教えるという話ではなくて、私自身も皆さまから色んなことを学んで考えていかなければいけないわけです。専門家なんて偉そうにしていますけれども、岡崎のことについては余程皆さまの方が色んなことを知っているわけですし、私なんかよりも岡崎の将来について皆さまの方が本当に良く考えられている方もいらっしゃるかと思います。そういうふうな人達の話を聞く機会とか、お互いに情報公開をする機会とい

うものをもっと設けていかないといけないなあと思っているわけです。私のような大学で教員をしている者は何をすれば良いのかということです。学生に一生懸命教えているんですけれども、市民の皆さまにも、先程のような都市をデザインしていく、愛されるような空間を作っていく上でのテクニックとかポイントなんていうものも伝えていくというようなことが出来たら良いなと思っています。そしてまた研究室、私とか私の学生も、市民の皆さまとお話をしながら、「岡崎って先生が思っているよりこうなんだよ」とか、「先生、こういう場所知らないでしょう？」っていうふうにして、教わっていけたら良いなと思っています。都市像を議論する場というものを、私どもが提供していくってことが出来たら良いなと思います。先程も、後ろで皆さんと話をしていた時に、市民の方が「先生の研究室に提案しに行くことがあったって良いじゃないか」というふうにおっしゃっていた。本当にその通りだと思います。私も皆さんのところに出向きたいと思いますし、皆さんから来て頂けるような研究室になると良いな。そういうことで、大学の研究室っていうのが都市空間を良くしていくための推進役というか、推進役っていうとちょっと偉そうなので、応援させて頂く役割っていうのが出来れば良いなというふうに考えているわけです。

私の所属しているのは建築学科でして、何が出来るかっていうと、こちらに大きい模型を今日も置かさせて頂いておりますけれども、そういうふうに模型を作って、イメージするっていうことを、イメージの助けにするっていうことが、まず出来るのではないかと思っているわけです。例えば岡崎の都市づくりまちづくりの目標として、市役所のホームページを見ると、「人、水、緑が輝く　活気に満ちた　美しい都市　岡崎」と書いてあります。言葉としてはそうなんでしょうけれども、こういうふうなフレーズが、ちゃんとその皆さまの頭の中に入っているかとか、「それはどういうふうなまちなんだろう？」っていうふうに皆さん思うと思うので、そういったことを例えばここに作ってありますように模型として表現すると、毎日こんなものが頭の中になくても、たまに思い出して頂けるのではないかと思います。こういうふうな目で見えるようなものを作ることによって、「先生ここにこんなものを作っちゃ駄目だよ」というような話し合いのネタになるのではないかと思っております。そしてこういうものを皆さまと議論しながらどんどん作り上げていって、色んな市民の方々に共有されていくと、例えばそのまちの中の自分の持っているビルを建て替える時に、「そうか、あのイメージに近づけるように考慮しないといけないな」なんていうふうに思って頂ければ、まち全体が変わっていくのではないかと思ったりするわけです。とにかく、そういうことを継続的に取り組んでいきたいと思っております。

こういうことを思ったきっかけは、たまたま大学で設計を教える時に、学生に設計の課題を出すときに、東岡崎駅と明大橋との間のところの景観を改善するという設計課題を出したわけです。今はミスタードーナッツがなくなってしまいましたけれども、ここを課題に出した時に、ある学生がこういうものを作ったわけです。乙川の緑が周りの建物の屋上まで伸びていくイメージを提案をしたわけです。別に上手い設計でもないんですけれども、こういう話は面白いなあと思ったわけです。こういうことについて市民の

皆さまが、「これはくだらない」って思うのか、「なるほど、こういうのもありかもしれない」と思って頂けるかというのは私も興味があったわけです。そこで、色んな人にご協力頂いて、東岡崎駅の駅ビルの３階のところに店が空いているところがあったので、名鉄さんに協力して頂いて、発表会というか、ささやかながら展示をさせて頂いたわけです。盛況というわけではなかったのですけれども、色んな人が見に来てくれて、話を聞いてくれて意見交換が出来た。こういうことが経験として面白くて、これをもうちょっと広げていけないかと思っています。新聞でも取り上げて頂くことが出来まして、学生もこういう場があると彼らなりに一生懸命作品を作るんですね。作ったものが良いかどうかは別ですけれども、教育にとっても本当に良いなとに思っております。

３.ＯＫＡＺＡＫＩ２０５０

「ＯＫＡＺＡＫＩ２０５０」というふうに、先ほどの東京大学の計画にあやかって名前を付けさせて頂いて、うちの研究室で４月から取り組んできました。都市のイメージの提案なんですけれど、敷地は都市全体、岡崎全体をやるわけにはいかないので、ここに東岡崎駅があって乙川があるんですけれども、この辺りを何とかイメージを提案出来ないかというふうに研究室で考えたわけです。ここにした理由は、東岡崎を初めて訪れた人が「岡崎ってこんなまちなんだ」という、この岡崎の顔になるところを、もうちょっとイメージ出来ないかと考えたことが１点と、比較的ここら辺は何というんでしょうか、時間が経過した建物があったりして、これから建て替わっていく話が何となくありそうだなと思えるエリアだったためです。特にここらへんは、南側に乙川を持っていますので、マンションを建てたら良さそうな場所なので、ややもすると色んな業者さんがぼんぼこぼんぼこ、さっきのようなマンションを建ててしまうのではないかというところなので、少しこういうところに対して研究室なりにイメージを考えてみたということになります。これが敷地です。ちょっと写真が古いのであれですけれど、概ねにそんなに違っていないのかなというふうに思っています。個人的にはここの合同庁舎が本当にちょっと大きすぎると思っているんです。この一等地を残念だなと思っております。恥ずかしながら、こういうものを提案してみました（写真３）。

（写真３：ＯＫＡＺＡＫＩ２０５０全体像）

今のと角度は一緒ですね。ここに東岡崎駅があって、ここにタワーを建てています。先程説明した海外の都市でもあったように、シンボルになるような、ランドマークタワーとしての役割なんですけれども、ちょっと眺めて頂きます。駅から乙川までの街区の屋上を全て緑化したらどうなるかを目で見たいのでやってみたということです。だから

間違っても私たちは東岡崎の駅前の街区の屋上を全部緑化しなさいと言っているわけではございません。例えば「川沿いの緑がずーっとまちまで伸びてきたらどんなイメージになるだろう」ということを模型を作って視覚的に検討してみるというためのもので作ったわけです。こういうものを作ってみると、「こんなふうになるんだ」ということがわかったり、「いや、こんなのは良くないよ」という意見がもらえたりして議論が活性化していくわけです。

画面の一番上にあるのは集合住宅です。その集合住宅が並ぶ時に、その一つひとつが違ったデザインの建物になるのではなくて、乙川の景色、綺麗な景観を邪魔しないような形を考えてみました。そして、乙川は川と親しめるような、親水公園ということを考えています。今のような状態ではなくて、もっともっと積極的に子ども達が遊び回ったり、広場があって色んな運動が出来たりというようになると良いなと思って作ったということです。それと東岡崎駅から乙川までの建築部分は屋上緑化するということは、さっきもお話しましたけれどもそういうことになっております。

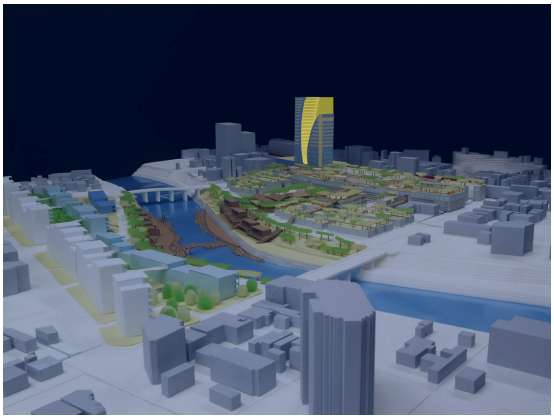
それとですね、ここの超高層のタワーですけれども、これはですね、岡崎に４つの大学があるわけですけれども、まちの中ではなくて、私どもの大学もそうですけれども郊外に出ていってしまっているわけです。「昭和３０年代頃に、愛知教育大学が岡崎にあった頃は、学生さんが居たりしてまちの中が賑やかだったんですよ」っていう話をまちの人から聞いて、「あっ、これだ」と思いました。ここも勿論サテライトなんですけれども、駅の上に徒歩０分のところに、４大学が共同でここにも校舎を持っていて、ここでも授業を受けたり勉強が出来るっていうところがあると、まちの中に学生が出ていって活気が出てくるんじゃないかと考えたわけです。先程の創造的都市というキーワードがあったのですけれども、そこから考えてみますと、何を思ってまちを盛り上げていくか。印象に残る都市の風景と共に、持続していく為の仕掛けとして、駅前の地域全体を、大学というふうに見立てたらどうだろうかと考えたわけです。要するに大学のキャンパスっていうのは、一般の人が基本的には入れないような形になっていますけれども、そこの地域はまちであって大学であるという、そういう混在した都市が出来たら良いと思っています。ただ、私どもが考えたのは２０代の１８歳から２２歳ぐらいの若い人だけが集うような、そういう意味での大学ではなく、もっと広い意味で幼稚園の子からお祖父さんお祖母さんまで、色んな人が学び合う、そういうイメージでの大学です。だから入学試験があるとか授業料という意味ではなくて、言ってみればその地域全体が生涯学習の都市になるというイメージです。例えば乙川の河原で、太極拳を習っているお祖父さんお祖母さんが居るとか、そういったことも都市が創造的に持続する為の重要なことだと思うんです。色んな知恵を持ったお祖父さんお祖母さんに長生きしてもらうということも勿論重要ですからね。そこで学んだり知ったりすることがそのままままちづくりに活かされる。そういうことをこの岡崎で出来たら良いな、と学生と一緒に考えたわけです。人々がそこで色んなことを学んでいくことで岡崎が元気になる。これまでの２０世紀のまちづくりっていうと、如何に消費させるかっていうことですね。都心部ではそういう商業地域をぼんぼん作っておりますけれども、これからはそうではなくて、そういう要

素があっても良いのですけれども、人々が学んで創造的になっていくっていということを、岡崎の駅前の地域では考えたらどうかということを提案しております。

先程の屋上緑化ですけれども、このエリア全体が、このスカイライン、さっきご説明した屋根と空との間のラインですけれども、それが緑で形成されるということが出来たら、印象深いまちになるんじゃないかと考えたわけです。勿論さっきから申し上げている通り、こういうふうな建物を建てるということではなくて、これは単なる緑のＶ字のイメージが理解出来れば良いんですけれども、そういうことを模型を作って提案しています。こんな感じですね（写真４）。その駅を降りた人が、地上ではなくて屋上部分を建物と建物が色々ブリッジで連結されていて、そこを伝って乙川までアプローチ出来る。こんなことを学生が提案しています。乙川の潜水橋は水かさが増えた時には水没してしまうんですが、晴れている日はここから降りて、ここを渡って、岡崎城の方ですとかシビコとか康生地区に行けたらいいなと考えています。

（写真４：緑のＶ字のスカイライン）

目立つランドマークとして考えたタワーなんですけれども、これは真ん中に吹き抜けがあって、ふたつに分かれている建物でカーブの曲線がですね、乙川のカーブのイメージを継承したつもりではあるんです。こういうふうに夜になるとこういう印象的な灯りのぼんぼりが灯るっていう（写真５）。こんな形のぼんぼりもなかなか無いので印象に残るんじゃないかというような提案でございます。一つひとつ詳しく見ていくと、「アカリミックタワー」なんていう、こう掛詞のネーミングをしておりますけれども、東岡崎駅のタワーのところに、さっきも灯りが光が灯っていましたけれども、「灯り」と「アカデミック」っていう大学のキャンパスが入るので掛詞になっています。駅の上の徒歩０分のキャンパスということです。こういったことが岡崎の風景を印象深くすることが出来れば良いなと考えております。



（写真５：ランドマークタワー）

駅前の屋上緑化がされたビルのところは、川に向かって段々になって、階段状に減っていく緑の階段ということで、「グリーンステアウェイ」なんて名前を付けています。先

程印象に残る都市の条件のところで、パノラマという話がありました。これを採用して、この屋上緑化された公園のところを歩き回る時に、至るところから乙川のこういう眺めが、わっと広がって見えたら良いなというようなことですね。そういうふうな第二の大地があって、人々は車の煩雑な感じから離れて、安全に公園の中を散策しながら、この上の階にお店も入っているので、そういうふうな買い物も出来たりするというようなことを考えました。

川のところは、これもまた変な名前付けています。「ユーリバーシティ」という名前で、乙川全体を今の自然のままに残すっていう話もあるんですけれども、このエリアぐらいは手を加えても良いんじゃないかと考えました。何とですね、斜面のところに、ここも色んな人々が生涯学習で学んだりするような場所になると良いなあと思ったので、講義室が入っていたり、製作をしたり、物を作ったり、彫刻をしたりするようなスタジオがあるということです（写真６）。ここら辺に屋外劇場があって、ここら辺で色んな演劇があったり、映画を見たりするということが、大きいスクリーンが出来たら良いなという話で、レストランがあったり、カフェがあるということですね。

（写真６：乙川の生涯学習親水公園）

これもまた色んな方に見せた時が、ちょうど去年の岡崎の大きな災害があった時で、ふざけているのかというふうに言われてしまいました。ここら辺が水浸しになっちゃうじゃないかと言われてしまったんです。けれども、色々と技術的に解決していくという方向もありますし、またこれと違った案を出していけば良いわけですから、こうやって色々と自由に都市の可能性というのを考えてみたいなというふうに考えています。筏みたいになっているところが、一つひとつ隙間に川の水が入ってきて子ども達が遊べるとか、そういうふうなことを学生は考えました。キーワードは「仲間と」という意味の「友（ユウ）」とか「ゆったり」という意味の「悠（ユウ）」とか「楽しく」の「遊（ユウ）」とか、そういう意味での「ユウ」という言葉をキーワードにして、大学（ユニバーシティ）という言葉と掛けてですね、「ユーリバーシティ」なんて言っております。

最後のところですけれども、こちらは余り機能を持たせてないんですけれど、集合住宅です。これはどういうことを考えたかというと、「オーバーレイ」って「重なり合う」という意味があるんですけれども、川沿いの南側に川を持つようなエリアに集合住宅がもし建つ時に、どういうことが考えられるのかということです。川に近いところから、この場合では２階建て、３階建て、４階建てぐらいのもの、８階建てっていうふうに徐々にですね、高くしていって先程のＶ字の緑の谷みたいなものを意識しているのと同時に、後ろに行くほど色を白くしてですね、段々と空に溶け込んでいくような、透明感を持っ

て乙川の景観を邪魔しない、そういうことを考えたわけです。何となく色が薄くなって空に溶け込んでいくといいなというようなことを学生と考えてみました。

この模型を作って今までに色んな専門家の方ですとか、市民の方とかに、あんまり大きい場ではなくて個人的にちょこちょことお話を聞かせて頂いたりして意見をもらったんですけれども、だいたい大学で発表したりしても、「実現可能なのか」とか、「こんな再開発が出来るはずないじゃないか」っていうような、否定的な意見も頂くわけです。だけどもやはり今一度確認したいのは、私たちは、今すぐ実現可能なこととか具体的なことというのを研究室で考えているわけではないわけです。こういったものはよっぽど得意な方が、町の中にコンサルタントさんですとか行政さんですとかいるわけで、そういう方達にお任せするとして、そういう方達が出来ないようなことをやっていきたい。今すぐ実現可能なことばかりをやってきた結果ああいうふうな都市が出来てきたとも言えるわけですから、そうじゃないことをやっているんだっていうことです。

それと、先程都市像のところでお話しましたけれども、将来少しでも近づけたら良いなというふうな目標像を考えたいといことですね。だから、「これが目標であるべきだ」ということではなくて、その第一歩ということで作ってみたということですので、今後色んな方々と議論をしていくと、こういう案からもっともっとその形が変わっていくこともあり得るんじゃないかと思っています。実際に研究室では次の第２案を作って、だいぶまた形が変わってきているわけです。そういったこともこれからは、色んな皆さんとお話をしながら作り上げていくっていうことが出来れば良いなというふうに考えております。

こういうビジョンを持って、まちの中が色々と、川を少し環境改善をしようとか、駅前を建て替えることがあったりするときには、一つひとつ細かいことを勿論考えていかなければならないわけです。そういう時になって、具体的に建物の高さはこのぐらいだとか、道路の幅はこれぐらい取るべきだというようなことは、詳細に詰めていくわけです。例えば今回の模型を、ある方に見せた時に、もうちょっと道路の幅が広いといいんじゃないかということを言われたわけです。それは勿論そうなのかもしれませんけれども、そういう細かいことを全部やっていくとキリがないわけです。だから目標像を考える時にはどこを押さえるのかということです。細かいことはちょっと後回しにして、大きな本当にみんなが共有したいイメージ、要するに目標像を考える時点でこそ話し合わなければいけない部分はどこなのかということを、知恵を絞ってみんなで議論をしていかなければいけないのではないかと思っております。

４．まとめ

まずは皆さんにこういうことに関心を持ってもらいたいというのが一番言いたいところです。こういう都市像を造っていくこと、創造的な都市、印象に残る都市ということを、便利なだけの都市とかそういうことを越えて、「大事だな」と思って頂けるような人々が増えてくると、また岡崎のまちが変わってくるんじゃないかと思っているわけです。ちょっと早くなってしまいましたけれども、ご静聴ありがとうございました。